

内容

Kiss-FM「ラヴィーナ & メゾン STORY FOR TWO」が掲載されました。

文

化

関西の劇作家や役者とともにラジオドラマを作った16年になる。神戸のラジオ局Kiss FM KOBÉの5分番組「STORY FOR TWO(ストーリー・フー・トゥー)」(現在土曜午後9時55分)である。脚本を担当した劇作家からは、松田正隆さんや深津篤史さんのように、「戯曲の芥川賞」と呼ばれる岸田國士戯曲賞を受賞する人も出ている。プロデューサーで脚本担当の1人でもある私が、長寿ラジオドラマの思い出を振り返ってみよう。

番組が始まった1996年は「劇団☆新感線」「南河内万歳一座」などが活躍し、関西の演劇シーンが熱かった時代。その前からラジオ番組を制作していた私たちは関西の演劇人とともにドラマを作りたいと思い、この番組をスタートさせた。

短作品を演じてもらうという選考方法だったが、腹筋さんは劇団の役者全員と参加。準備段階では全員が一斉に大きな声で下読みを始め、選考する私たちもなんだかかわくわくした。特に腹筋さんは腕立て伏せなど入念な準備運動をしていて、台本読みからは存在感と

伝える力を感じた。一方、平野さんは維新派からは唯一の参加。「しやべらないセリフ」を標榜する劇団の役者さんだが、台本読みは抜群のうまさ。震えるような繊細な演技だった。

96年4月5日放送の第1回は私の脚本。「初めての春に」というタイトルで、公園での男女の出会いを描いたものだ。童話は書いていたが、脚本を書くのは初めてなので、幾分戸惑ったように記憶している。演出が「詩のようで悪くない」と言ってくれたのが幸いだった。

勢いやライブ感大事に初期作品で最も記憶に残っているのが、松田さんが脚本を担当した「緑にしたい」と思っているため、収録途中で切つて後で編集してつなぐことは基本的にはしていない。すべり出しで「よし、イケるぞ」と思える時も最後でつまずくと「残念！最初から録り直し」

脚本家の世代によって作風が異なるのも面白い。例えば、上田誠さんの「あれが敵のアジトだと思っけど違っかもしれない」(2004年2月13日放送)。いちいち本部におうかがいをたてる作業員を描いているのは「指示待ち世代」に近いからだろうか。

最近の作品では、ピンク地底人3号さんの「両足の気持ち」(12年11月10日放送)に考えさせられた。左足と右足の会話という面白い構成で、自殺を考えている人物を描き出す。最後は雨が降っていたため、自殺を思いとどまった模様。死ぬよりも雨にぬれることを嫌がる感覚が新鮮だった。毎年クリスマスには、時間を拡大した特別番組「プロデューサー」

今月22日の放送で873話を迎えるが、まずは1001話を目指したい。そして、臨場感あるロケ収録にも挑戦したい。何よりも関西演劇界の新しい優れた才能に出会えるのが楽しみである。(あすか・たまき)

FMドラマ 舞台裏の物語

◇関西の劇作家らと5分番組、10話目指す◇

飛鳥 たまき



収録中の腹筋さん(左)と平野さん



したたる五月」(97年5月2日放送)。「現代社会研究会」の女子大生が男子新入生を説教する内容だ。当時の大学キャンパスの雰囲気が見事に立ち上がってきた。京都府京田辺市の同志社大学内で収録した音を、ドラマの効果音として使った。勢いやライブ感を大事にしたことになる。

腹筋さん、平野さんは年を重ねるごとに成長。同じ脚本であっても、演出の注文に応じて1回目と2回目では全く違うタイプの男女を演じてくれる。番組後半にあるフリートークの話題も自由自在。「まさに腹筋さん」と平野さんの番組になったなあ」と思う。

作風で世代がわかるレギュラーの役者は16年間変わっていないが、脚本家は定期的に変えていく。その中で長く書いてくれたのが、8年間の樋口ミユ(当初は美友喜)さんと、7年間のこまのはえさん。ゲストとして書いてくれた脚本がとても良かったので、レギュラー作家になってもらった。